# 第４章　総括

## 第１節　発掘調査の成果

5ヶ年に及ぶ調査の結果、チャシコツ岬上遺跡はオホーツク文化終末期～トビニタイ文化期にかけてのごく短期間に利用された集落跡であることが明らかとなった。集落内には窪地となって残る31軒の竪穴住居のほか、積石を伴う土坑墓、配石を伴う土坑、窪地を利用した廃棄層、多様な配石遺構など様々な遺構が構築されており、限定的な空間に密集して遺構を築くオホーツク文化的な在り方が認められる。本節では発掘調査によって確認された遺構や遺物についての成果を総合的に評価し、遺跡の内容理解を深めることとしたい。

### １．遺構

オホーツク文化の集落を構成する代表的な要素として竪穴住居、墓、廃棄層の3点が挙げられる。本遺跡ではそれらすべてが検出され、特異な立地にも関わらず、チャシコツ岬上で完結した恒常的な集落機能を保持していたことが明らかとなった。以下、これら3種の遺構について順に見てゆく。

まずに竪穴住居跡について考察する。地表面から確認できる31軒の竪穴は、5ないし6角形の平面形、埋没具合、出土遺物等からすべてオホーツク文化～トビニタイ文化に属するものと推察される。これらの竪穴群は分布図（第3図）を見る限り、いくつかの単位で遺跡内に分布しているように見えるが、22・23号竪穴の切り合い関係から、隣接する竪穴が必ずしも同時併存しないことが示された。したがって、ある程度の間隔をもって一時期に数軒の竪穴住居が併存し、建て替えにより遺跡内で建物分布が変遷していったと考えられる。

唯一完掘した5号竪穴は保存状態が良好であり、骨塚やそれに伴う完形土器群の位置関係も明確に捉えることができた。オホーツク文化の竪穴住居では一般的に貼床の開口部となる入口部と相対する奥壁部に、ヒグマの頭部を主体的に集積した骨塚がしばしば認められる。特に道東部ではモヨロ貝塚に代表されるように、奥壁部だけでなく開口部側や炉の周辺などにも複数の骨塚がもうけられる例が少なくない（米村編2009）。その点では開口部に3基の骨塚を備えた本遺跡の5号竪穴もその例にもれない。しかし、注目されるのは第3章8節の分析でも指摘されるように、入口部側にのみ骨塚が存在し、奥壁部には一切の骨集積が見られないという点である。複数の骨塚を備えた竪穴住居跡のうちこのように奥壁部の骨塚を欠く例は稀であり、5号竪穴の特異性が窺える。

一般に奥壁部以外に配される骨塚では、動物の四肢骨が主体となる例が多く見られ、本竪穴の骨塚でも資料数の多いヒグマに関しては頭骨がほぼ出土せず、掌先・足先を構成する部位に偏る傾向が認められた（第3章8節佐藤・吉永）。しかし、ヒグマに次いで資料数の多いエゾクロテンは全身の骨格が出土していることから、種によって対象となる部位が異なることが分かる。これより、本竪穴では明確な意図をもってヒグマの頭骨を除いていたといえよう。そこで問題となるのが最も一般的な信仰対象であるはずのヒグマ頭部の所在である。

調査によってヒグマの頭部に由来する資料が確認されたのは、意外にも平坦地に構築された配石遺構（TR6）中であった。角礫の間隙に遊離した状態でヒグマの歯が分布しており（第26図）、一部は被熱資料と判断されている（第3章8節佐藤・吉永）。同配石遺構中からは大型哺乳流類の後頭顆破片や多数の骨片が出土していることから、ヒグマの歯のみが配置されたとは考え難いので、当時は頭蓋が存在したと考えられる。したがって、遺跡外から搬入された礫の間（もしくは上部）に、一部被熱したヒグマの頭蓋が安置されていたということになる。こうした状況は実用的な目的と評価しにくく、儀礼的な側面が強く示唆される。配石遺構を仮に屋外儀礼とした場合、屋内儀礼と屋外儀礼で出土するヒグマ骨の部位に補完関係が認められることからも（第86図）、屋内と屋外の儀礼行為が密接に関係していた可能性があることを指摘しておきたい。

また、5号竪穴は焼失住居であり床面からは多量の炭化材が出土した。樹種は建築材として加工が容易なイチイやモミ属（トドマツ）を主として用いるという選択的な利用が窺え、骨塚部分では板材として利用されている。さらに、5号竪穴の調査成果はそれだけに留まらず、覆土中に構築されたトビニタイ土器を伴う配石遺構の存在によって、オホーツク文化終末期からトビニタイ文化への明らかな繋がりが示されることとなった。これ

はオホーツク文化の変遷を考える上で貴重な情報といえよう。

次に、墓について考察する。オホーツク文化の集落では居住区域とは別に墓域を形成する例が散見される。代表的な例として網走市のモヨロ貝塚がある。竪穴住居跡が存在しない空間に数百基の墓が密集して確認されており、オホーツク文化最大級の墓域として注目される（駒井編1964、米村編2009）。一方、チャシコツ岬上遺跡では2基の土坑墓がそれぞれ単独で検出されている。1号墓は竪穴住居の無い平坦地に構築されているが、周囲から墓は検出されず独立した墓域と考えるのは難しい。また、2号墓は5号竪穴に隣接して作られており、周辺には広い墓域を形成できるような空間は存在しない。したがって、本遺跡は居住域から独立した明確な墓域を形成せず、竪穴群の間隙に墓を構築していたと推察する。立地に制約された限定的な空間を効率よく利用するために、大規模な墓域を設けなかった可能性が高い。

また、2基の墓からはそれぞれ人骨（歯）が出土しており、1号墓の被葬者は20歳程度の成人、2号墓は4歳前後の幼児という分析結果であった。たった2基ではあるが幼児から成人までが岬上に暮らし、同様に埋葬されていることを示唆している。また、1号墓ではニシン科・アイナメ属・タラ科・サケ属などの焼骨、2号墓の覆土中には煮沸された状態の裸性オオムギ、サメ類・ニシン科・サケ属・カレイ科のなど焼骨が出土した。出土遺体がすべて焼骨であり、両墓坑ともニシン科の資料を主体とする共通性から、混入ではなく副葬と推察される。このように、オホーツク文化終末期における葬送儀礼の一端も明らかにできた。

第三に廃棄層について述べる。従来、標高50 mを超える高所でオホーツク文化期の廃棄層が確認された例は無く、本遺跡のような高所に暮らした人々の生業活動とその特性を分析する上で重要な資料群である。廃棄層はほぼ脊椎動物のみで構成され、タラ科・サケ属・ニシン科・アイナメ属といった魚類がその大半を占め、その他に鳥類、ヒグマ・エゾクロテン・アザラシ科などの哺乳類遺体も少なからず含むという分析結果であった（第3章8節佐藤・吉永）。動物種や回遊する魚類の季節性などを勘案すると、本遺跡は季節的な利用ではなく、通年利用の集落として機能していたと考えられる。

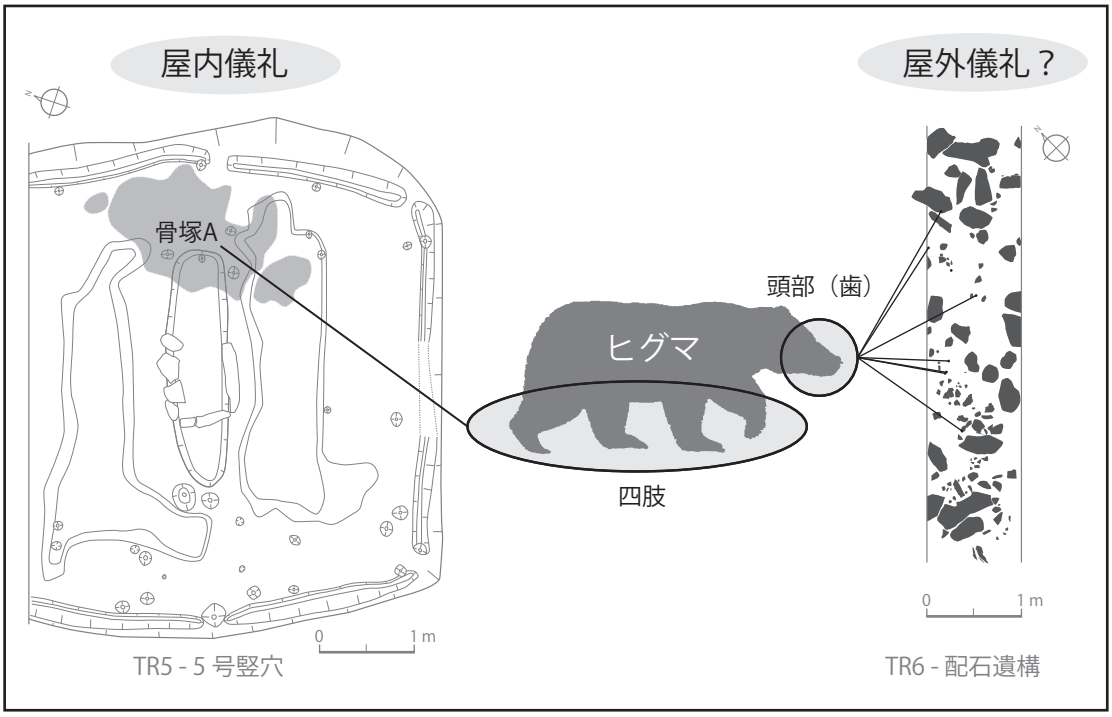
また、道北部では活発に漁獲されていたウニや貝類の利用が本遺跡ではほぼ認められないことも分析結果から示されている。つまり、廃棄層中から得られた夥しい量の魚骨と、貝類の不利用は、道東部のオホーツク文化の海洋適応の在り方を示している。

一方、陸獣ではエゾシカの遺体がほとんど見られない点も注目に値する。エゾシカは道東部のオホーツク文化後期の遺跡では広く利用が認められ、チャシコツ岬上遺跡に隣接するチャシコツ岬下B遺跡からもエゾシカの遺体が検出されており（高橋2002・2011）、屋内の骨塚にもヒグマとともにエゾシカが組み込まれている。そのため、遺跡周辺にエゾシカが生息し、捕獲されていたことは確かである。一方で、チャシコツ岬上遺跡と同時期かつ似た地形上に立地する網走市二ツ岩遺跡では6軒の竪穴住居跡のうち3軒が発掘されているが、竪穴の床面や骨塚の動物遺体中にやはりエゾシカの出土が全く認められない。これより、あえて捕獲しなかった、もしくは遺跡内に持ち込まなかったなど様々な可能性が考えられるが、未調査部分に存在する可能性もあるため現状では出土しない理由を判断することは難しい。よって、エゾシカの利用に関しては今後も検討すべき課題としたい。

また、上記した竪穴住居・墓・廃棄層の他に、本遺跡を特徴づける遺構として大小様々なレキを用いた配石遺構がある。配石遺構を構成する礫はほぼすべてが遺跡外からの搬入物であり、礫に対する志向性が窺える。本遺跡で検出された例は、平坦地に構築されたもの（TR2、TR6）と竪穴の窪地に構築されたもの（TR5）に大別され、それぞれ異なる意図を持って作り分けられたものと推察する。それぞれの特性を個別にみていくと、平坦地の配石遺構（TR2・TR6）では礫が一部被熱し、被熱した動物遺体（ヒグマ・海獣類）を伴う。一方、窪地の配石遺構（TR5）は礫が全く被熱しておらず、複数の完形土器を伴うという傾向があり、構築場所だけでなく内容についても差違が認められた。機能は不明確であるが、被熱した動物骨を伴う例については実用的というよりは儀礼的な側面が示唆される。土坑墓の上部にも積石が施されることからも、本遺跡における礫の役割は広範かつ多様であったと考えられる。

## 2．遺物

チャシコツ岬上遺跡からは4ヶ年の発掘調査によって約一万点以上の出土遺物が得られており、その大半はオホーツク土器の破片と黒曜石製の剥片石器である。そのため、ここでは遺跡の存続期間を推定する上での指標と




**第86図 ヒグマ骨の出土地点**

なる出土土器群と、生業活動を反映する出土石器群に的を絞ってみていきたい。

まず土器は時期が判別可能なもののうち約88％をオホーツク土器が占めている。この割合の高さからもチャシコツ岬上遺跡がオホーツク文化期の単一的な集落であることを窺い知ることができよう。特に5号竪穴住居跡では3基の骨塚に伴ってオホーツク土器の良好な完形資料（第30図）が得られており、直上に位置する配石遺構（TR5）からも複数のトビニタイ土器（第46図）が出土している。これらの土器をもとにした第3章1節の分析によれば、その大多数がオホーツク文化貼付文期後半（熊木編年Ⅳ群b類）のものであり、貼付文期前半（熊木編年Ⅳ群a類）がわずかに含まれるという結果であった。これより、貼付文期前半以前には遺跡の利用は低調で、貼付文期後半から竪穴住居跡等の主要な遺構が構築されたことが指摘されている（第3章1節熊木）。

さらにその中で、貼付文期を細別する指標として「3本重畳パターン」という文様構成を設定し、オホーツク文化貼付文期後半に起こる「文様の単純化」についてもふれている。チャシコツ岬上遺跡の5号竪穴からはこの「3本重畳パターン」の完形土器3個体が出土しており、チャシコツ岬下B遺跡、二ツ岩遺跡（網走市）、トーサムポロ遺跡R-1地点（根室市）からも同様な文様構成の完形土器が出土している（平川・野村編1982、松田編2002・2011、愛場・広田編2015）。よって、これらの遺跡はオホーツク文化終末期に営まれた集落跡と考えて差し支えないだろう。

また、本遺跡を考える上で重要な要素といえるトビニタイ文化へのつながりであるが、この3本重畳パターンに着目すると理解しやすい。つまり、この3本重畳パターンの文様構成は貼付文期後半のオホーツク土器からトビニタイ土器へと受け継がれているということである。これは5号竪穴と上層配石遺構（TR5）の上下関係とも矛盾無く、オホーツク文化終末期～トビニタイ文化期にかけて連続的に本遺跡が利用されていたことの証左にほかならない。

次いで石器について述べる。出土石器を俯瞰すると黒曜石製の石鏃が卓越する一方で、ナイフやスクレーパーの出土がごく少数に留まる傾向がある。第3章2節の分析では、その要因として剥片石器の核となる石核状フレイクが3.1～5.6 cmと小さなものしか出土していないことを挙げ、石鏃以外の製作が困難であったとみている。また、同時期の他遺跡でも同様な現象が認められることから、このことは本遺跡に限った傾向ではない。おそらく、ナイフやスクレーパーは刀子などの鉄製品で代用するか、もしくは偶発的に手に入れた前時代遺物を再加工して使用したものと見なされる。加えて、この組成の偏りは代替品としてあげられる刀子の出土量が多いことと

も整合的である。

以上のように剝片石器の器種に偏りがあることは、石材の黒曜石の形状によるところが大きく、本遺跡における石器組成は同時期の恒常的な集落と共通していることが明らかとなった。

一方、最も出土量の多い石鏃に関しては、形態と石材の面から分析が行われた。形態はオホーツク文化後期以降に有茎のものが多いという従来の調査結果に合致するが、石材に関しては知床半島を境に網走・斜里側と根室側とで異なる様相が認められると指摘されている（3章2節松田）。すなわち、網走・斜里側では主に黒曜石が支配的であるのに対し、根室側ではジャスパーやチャートなどが全体の約3割を占めるという状況である（3章2節松田）。この差は各地域の石材調達と直接的に関係し、原産地に近く比較的容易に黒曜石を入手できた網走・斜里方面と入手がやや困難な根室地域の差を示していると考えられる。加えて、ジャスパーやチャートは黒曜石に比べ色彩豊かであることから、装飾的な意図をもった根室側の石材選択もうかがえる。チャシコツ岬上遺跡ではこういったジャスパーやチャート製の石鏃は出土しておらず、同じ知床半島であっても羅臼側からの石材や製品段階での流通は希薄であったと推察される。

ところで、上記したオホーツク文化期に一般的に目にする石器類だけでなく、特徴的な礫石器や素材も出土しており、特に第42図1～5に示される玄武岩製石器が注目される。これらは板状に薄く剥離した玄武岩を素材としているが、北海道でこの板状節理が一番顕著に見られるのは利尻島の沓形溶岩である。沓形溶岩は粘性が低いため、鉱物が一定方向に配列する構造となり、板状に薄く剥離する特徴がある。こうした構造は知床半島の火山では見られないため、チャシコツ岬上遺跡から出土した玄武岩製石器とその素材も外部からの搬入品と考えられる。ただし、大空町の藻琴山でも小規模に産するため、これらとの成分の比較は今後確認すべき課題としたい。

以上、今回の調査によって検出された遺構や出土遺物の内容について述べてきた通り、5ヶ年の調査によってチャシコツ岬上遺跡の特性を示す成果が得られていることが分かる。しかし、本遺跡の位置づけを明確化するためにはオホーツク文化の他遺跡との比較検討が不可欠であり、次節ではより広い視野をもって相対的な位置づけを定めることとする。

（平河内毅）

## 第２節　オホーツク文化終末期の集落としての位置づけ

オホーツク文化の遺物を包含する遺跡は北海道内で約200以上確認されており（第87図）、その分布は海岸に集中し、海から最も離れた集落でさえ現海岸から1kmほどしか離れていない（天野2008）。しかし、これだけ多くの遺跡がこれまでに発見されているにも関わらず、オホーツク文化終末期の様子を伝える遺跡は極めて少ない。そのため、北海道におけるオホーツク文化の終末には依然として不明瞭な点が多々残されており、全体像を把握するには資料の増加が待たれる状態にあった。その点においてオホーツク文化終末期に営まれた本遺跡の意義は大きく、北海道のおけるオホーツク文化の変遷を理解する上で不可欠の情報を提供するものである。よって、本節ではチャシコツ岬上遺跡の性格と特性を整理し、他の遺跡との比較をもってオホーツク文化終末期の集落としての位置づけを明確化したい。

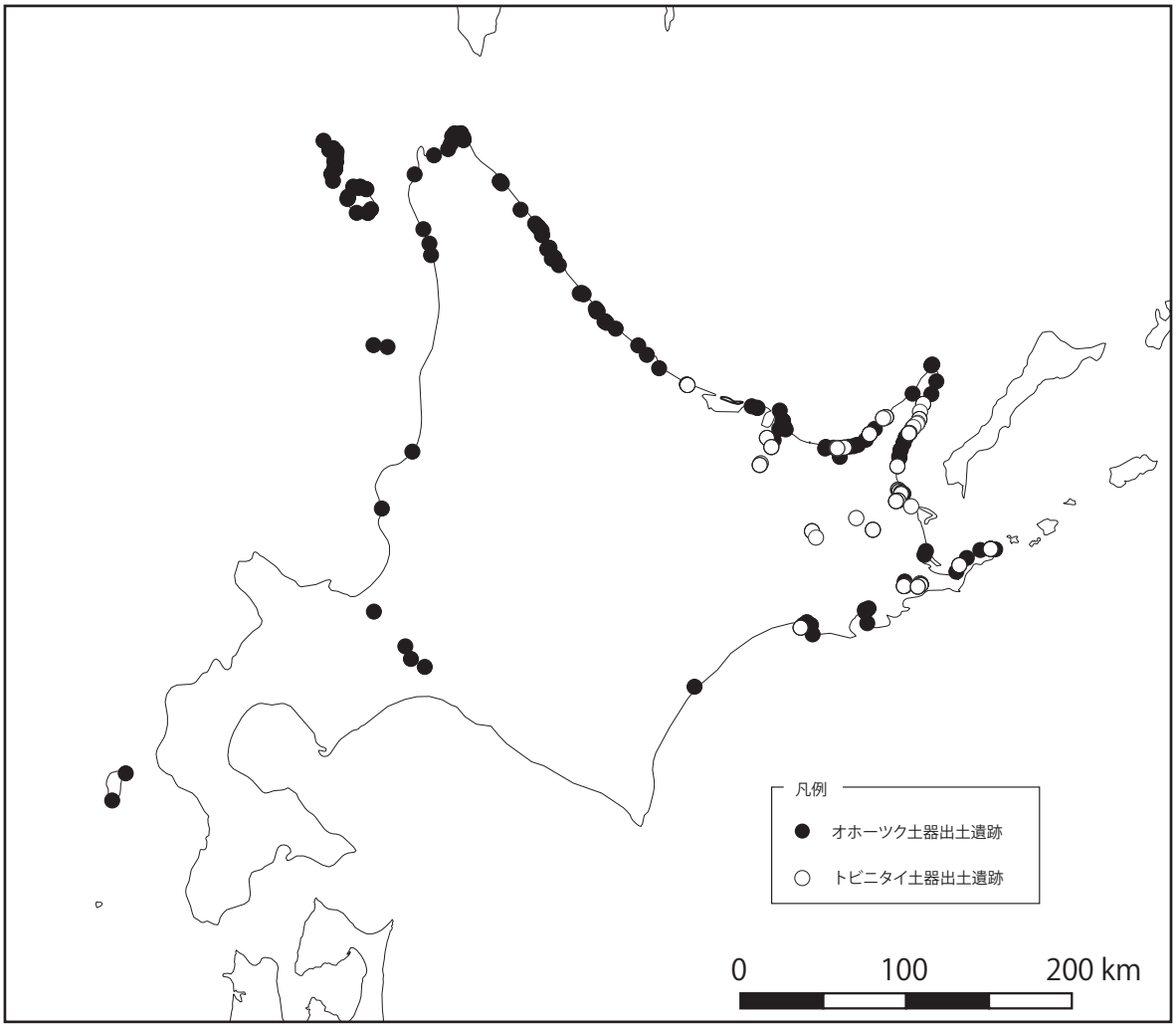
まず、チャシコツ岬上遺跡を特徴づける要素としては竪穴住居跡の規模と密度が挙げられる。オホーツク文化後期以降にみる竪穴住居の小型化は従来の調査成果からも明らかであり、ウトロ地域でもその傾向を顕著に認めることができる。すなわち、ウトロ遺跡のオホーツク文化中期の竪穴では10 mを超える大型主体であるのに対し（松田編2011）、同文化終末期のチャシコツ岬上遺跡では5～8 m規模の竪穴が全体の約7割を占める状況にある。このように、竪穴住居の小型化という観点ではチャシコツ岬上遺跡もオホーツク文化後期以降の傾向に合致している。しかし、竪穴の規模こそ普遍的であるが、本遺跡の竪穴数と密度が突出していることは特徴的である。もっとも、竪穴数だけでみれば47軒のオホーツク文化期中期～後期の竪穴が確認されている栄浦第二遺跡に劣るが（武田編1995）、同文化終末期のごく短期間に31軒もの竪穴が高密度に構築された遺跡はチャシコツ岬上遺跡を除いて他に無く、独自性と評価できる。

また、今回の発掘調査によって新たに存在が確認された墓の在り方にも本遺跡の特性がよく表れている。墓坑上を礫で飾る例は知床半島周辺ではまま見られるが、せいぜい数個の大礫を配置する程度であり、本遺跡ほど大々的に集積する例は稀である。しかも複数の大礫を海岸段丘上へ搬入してまで用いていることからも、重要な要素として考えられていたことは疑いない。機能を挙げるとすれば、大規模な積石は野生動物による掘り返しの防止や、新たな構造物によって墓が破壊されることを未然に防ぐ墓標的役割といったことが考えられる。特に後者は高密度に次々と遺構を構築するチャシコツ岬上遺跡の特性をよく示していると言えよう。一方、チャシコツ岬上遺跡の利用が開始される以前のウトロ地域では全く異なる墓域の在り方が認められる。ウトロ遺跡に隣接する神社山洞窟からは多数の遺体が上下関係をもって出土しており（高橋1993、石田・西本・松田1994）、長期にわたる継続的な利用が窺える。しかし、オホーツク文化終末期までの利用は認められず、それ以前にウトロ遺跡の集落が移転したものと推察される。このように同文化終末期には神社山のような特定の場所を墓域として利用する例が見られないのは、後述する集落立地の変化によるところが大きいのかもしれない。

先述した通り、墓域の在り方や竪穴住居の規模など同一地域においてもオホーツク文化終末期までに変化したことが多々存在することが分かる。しかしその反面で、海産資源への高い依存度はオホーツク文化終末期になっても変化なく保持されており、脊椎動物のみから成る構成も道東部のオホーツク文化にあっては決して珍しくないとされる（第3章8節佐藤・吉永）。こうした動物利用は資源面だけでなく、儀礼面にも反映される。

本遺跡では5号竪穴の骨塚に代表されるように、動物儀礼的要素を含む遺構がいくつか検出されており、特にヒグマは主体的に用いられている。ヒグマ儀礼に関しては過去にチャシコツ岬下B遺跡で検出されたトビニタイ文化のヒグマ祭祀遺構の存在を無視できない。すなわち、屋外にヒグマ四肢骨を中心として組み、この周囲に完形土器や石器類、礫などを配置したものである。このトビニタイ文化のヒグマ祭祀遺構と今回検出されたオホーツク文化の5号竪穴および配石遺構（TR6）の検出状況を整理・検討することでチャシコツ崎周辺におけるオホーツク文化終末期～トビニタイ文化への動物儀礼の変遷過程を示すことができるかもしれない。

まず、出土土器からチャシコツ岬上遺跡の5号竪穴と配石遺構（TR6）が古く、チャシコツ岬下B遺跡のヒグマ祭祀遺構が新しい時期のものと捉えられる。次に、屋外に構築された遺構同士を比較すると、共通点としては




**第87図 北海道内のオホーツク文化およびトビニタイ文化の遺跡分布**

ヒグマの部位が選択的であること、土器や石器、礫などの遺物を伴うことが挙げられる。一方、相違点としてはチャシコツ岬上はヒグマ頭部（一部被熱）が対象とされるのに対し、チャシコツ岬下Bは四肢骨（生骨）が対象とされていることが挙げられる。これより、共通点はヒグマの屋外儀礼の在り方を示しており、相違点は時期差あるいは遺跡毎の差によるものと考えられる。問題はこの相違点である。仮に相違点を時期差とした場合、チャシコツ岬上段階ではヒグマ頭部が屋外儀礼の対象とされ、岬下B段階になると四肢骨も屋外で儀礼を行う対象となるということになる。これにチャシコツ岬上遺跡の5号竪穴の四肢骨主体骨塚の事例を考え合わせると、オホーツク文化終末期頃に奥壁部のヒグマ頭骨が次第に屋外に祀られるようになり、後のトビニタイ文化の段階では四肢骨もやがて屋外の儀礼場をもうけるようになったということになる。

被熱していないため遺体が残存しなかったという可能性も考慮する必要があるが、トビニタイ文化集落であるウトロ滝ノ上遺跡では屋内からヒグマ等の動物骨の出土がまるで認められない点は示唆的である（駒井編1964）。

ただし、トビニタイ遺跡（羅臼町）では2号竪穴内からヒグマ頭骨などの骨片群が出土しており、トビニタイ文化段階でもヒグマ頭部の屋内儀礼が継続されていたことが示されている（駒井編1964）。よって、地域毎に動物儀礼の変遷過程は異なるものと捉えられる。このように上記の仮説が当てはまるのはウトロ地域という限定的な範囲ではあるが、儀礼面も次第に変化してゆく様子が窺えるのはオホーツク文化終末期の特徴といえよう。

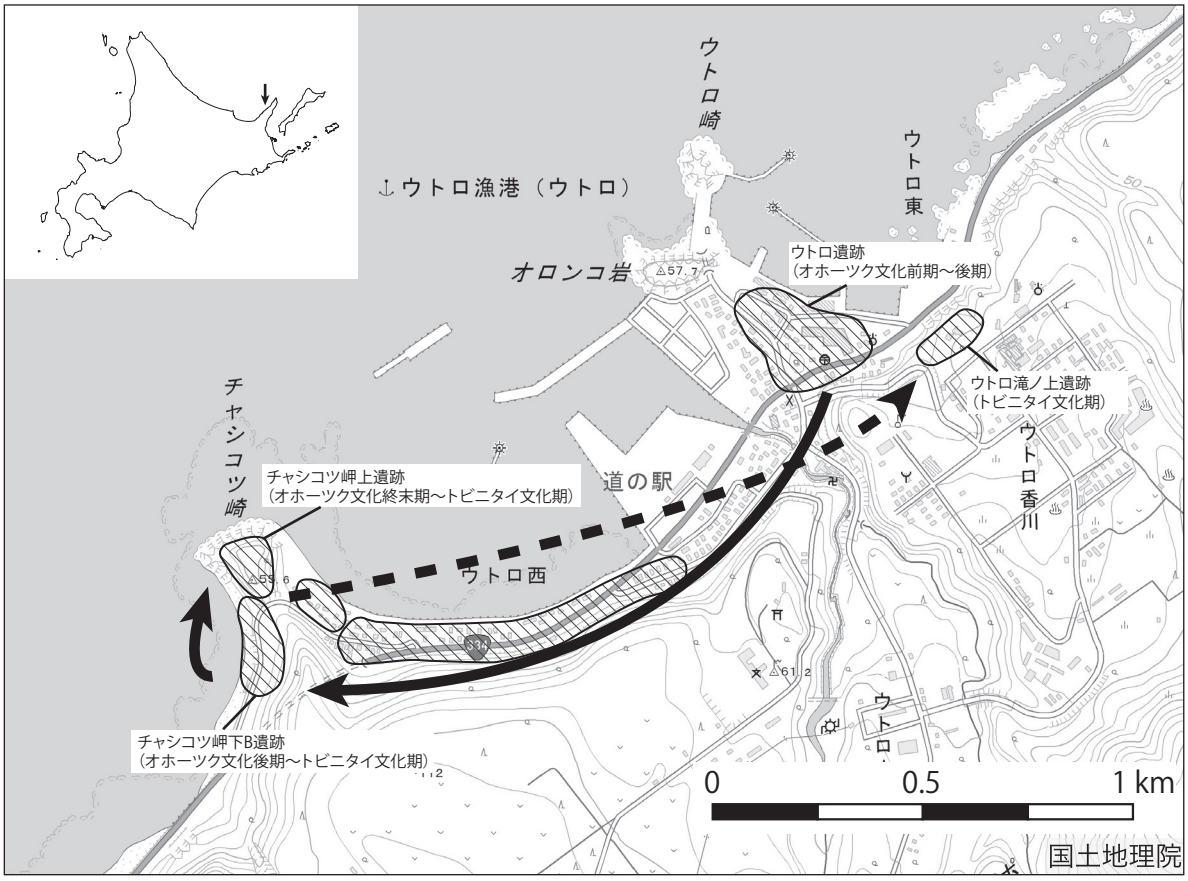
これらのことから、チャシコツ岬上遺跡は実用的要素だけでなく、墓や動物儀礼の場といった儀礼的要素も持ち合わせていることがわかる。利用可能な平坦地が限定的な地形上であるからこそ、高密度にすべての要素が集約されていると考えられる。

ところで、遺跡立地に関してはオホーツク文化期のある時期を境に変化することがこれまでの調査から知られている。すなわち、オホーツク文化中期頃は標高10 m以下の海岸砂丘等に立地する傾向があるが、後期以降は比較的高所の段丘上に集落を構えるという変化である（表7）。この傾向はオホーツク文化終末期においても継続的であり、同文化終末期の代表的な集落である二ツ岩遺跡（網走市）やチャシコツ岬上遺跡などは標高40 m以上の高所に立地している。一見、食料資源や水の搬入の手間、海へのアクセスを考えると不便ともとれる立地だが、高所ゆえの利点も存在する。それは広範な眺望である。チャシコツ岬上遺跡のような圧倒的な眺望範囲は狩猟対象の観察、船の視認性の高さ、異集団への牽制など様々な効果をもたらし、擦文集団との交流が活発化するオホーツク文化終末期には必要不可欠な要素であったと推察される。さらにチャシコツ岬上遺跡の場合、周囲が急崖という閉鎖的な地形的特徴も持ち合わせている。

本遺跡ほど顕著では無いが、急峻な崖に面した（以下、懸崖的）集落は他地域にも存在し、代表的なものでは二ツ岩遺跡（網走市）や能取岬西岸遺跡（網走市）、知円別南岸遺跡（羅臼町）などが挙げられる。興味深いのは、懸崖的な環境は他地域にも存在するにも関わらず、こうした遺跡立地がトビニタイ文化へと受け継がれている地域は知床半島部に限定的なことである（大西2009）。したがって、遺跡立地の面からも知床半島はオホーツク文化とトビニタイ文化のつながりが理解しやすい地域といえる。

これを裏付けるように、チャシコツ岬上遺跡の存在するウトロ地域においてオホーツク文化前期～トビニタイ文化期までの変遷を連続的にみることができることが今回の調査により明らかとなった。第3章1節のオホーツク土器の分析によれば、ウトロ市街地に位置するウトロ遺跡はオホーツク文化前期～後期までの長期にわたって利用され、終末期のチャシコツ岬上遺跡とは明確な時期差が示されている。さらに、隣接するチャシコツ岬下B遺跡はチャシコツ岬上遺跡よりもやや古い時期から利用されており、第88図に示されるような集落変遷が想定される。そして、チャシコツ岬上遺跡はトビニタイ文化期まで利用されていることから、先述した高所かつ懸崖的な集落であるウトロ滝ノ上遺跡への変遷も示唆的である。つまり、ウトロ地域においてチャシコツ岬上遺跡の存在はこれまで不明確であったオホーツク文化とトビニタイ文化の間隙を埋める重要な存在と位置づけられる。

（平河内毅）




**第88図 ウトロ地域の集落変遷**

## 表7. オホーツク文化集落属性表

| No. | 地域 | 所在地 | 遺跡名 | オホーツク文化 | | | トビニタイ文化 | 標高 | 竪穴住居数 | 墓数 | 廃棄層(骨集積含む) | 引用文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 前期 | 中期 | 後期 | | | | | | |
| 1 | 道北 | 礼文町 | 香深井5遺跡 | ○ | ○ | | | 3 | △ | × | × | 荒川編1997<br>内山編2000 |
| 2 | | | 香深井1(旧A)遺跡 | ○ | ○ | | | 4 | △ | △ | ○ | 大井・大場編1976<br>大井・大場編1981 |
| 3 | | | 浜中2遺跡 | ○ | ○ | ○ | | 10 | ○ | ◎ | ○ | 前田・山浦編1992ほか |
| 4 | | 利尻富士町 | 沼浦海水浴場遺跡 | ○ | ○ | ○ | | 4～5 | △ | △ | ○ | 北・土肥編2017 |
| 5 | | | 利尻富士町役場遺跡 | ○ | ○ | ○ | | 13.4～18 | △ | △ | ○ | 内山編1995<br>山谷編2011 |
| 6 | | 稚内市 | 泊内遺跡 | ○ | | | | 1.5 | ◎ | × | × | 稚内市教委1964 |
| 7 | | 枝幸町 | 川尻北チャシ | ○ | | | | 7～11 | △ | × | × | 大場ほか1972 |
| 8 | | | ウバトマナイチャシ | ○ | | | | 17～19 | △ | × | × | 右代ほか1998 |
| 9 | | | ホロベツ砂丘遺跡 | | ○ | | | 3～4 | △ | × | × | 枝幸町教委編1985 |
| 10 | | | 目梨泊遺跡 | | | ○ | | 15～25 | ◎ | ◎ | ○ | 佐藤編1988,1994<br>高畠編2004 |
| 11 | 道東(オホーツク) | 雄武町 | 雄武竪穴群 | | ○ | ○ | | 10～14 | △ | × | × | 平川編1995 |
| 12 | | 紋別市 | 栄遺跡 | | | ○ | | 10 | △ | × | × | 小柳・因幡1969 |
| 13 | | 湧別町 | 川西遺跡 | | | ○ | | 6 | △ | × | × | 青柳編1995 |
| 14 | | 北見市 | 栄浦第二遺跡 | | ○ | ○ | | 8～10 | ◎ | ○ | ○ | 藤本編1972 |
| 15 | | | トコロチャシ跡遺跡群 | | | ○ | | 18～19 | ○ | △ | ○ | 熊木・國木田2012 |
| 16 | | | 常呂河口遺跡 | | | ○ | ○ | 2～5 | △ | △ | × | 武田編1996 |
| 17 | | 美幌町 | 元町2遺跡 | | | | ○ | 20 | △ | × | × | 荒生編1986 |
| 18 | | 女満別町 | 元町遺跡 | | | | ○ | 10 | - | × | × | 大場・奥田1960 |
| 19 | | 網走市 | 最寄貝塚 | | ○ | ○ | | 5～6 | ○ | ◎ | ○ | 駒井編1964<br>米村編2009 |
| 20 | | | 能取岬西岸遺跡 | | ○ | ○ | | 40 | △ | × | × | 青柳ほか1999<br>角ほか2010 |
| 21 | | | 二ツ岩遺跡 | | | ○ | | 45 | △ | × | × | 野村ほか1982 |
| 22 | | | 嘉多山3遺跡 | | | | ○ | 20～30 | △ | × | × | 米村編1992 |
| 23 | | | 湖南遺跡 | | | | ○ | 25 | - | × | × | 大場・奥田1960 |
| 24 | | 斜里町 | ウトロ遺跡 | ○ | ○ | ○ | | 4～8 | ◎ | ◎ | ○ | 松田2011他 |
| 25 | | | カモイベツ遺跡 | | ○ | ○ | | 4～5 | ○ | △ | × | 豊原・坂井2009ほか |
| 26 | | | トーツル沼1遺跡 | | ○ | ○ | | 3 | △ | × | ○ | 松田ほか2001 |
| 27 | | | オタモイ1遺跡 | | | ○ | | 4～8 | △ | × | × | 松田ほか2002 |
| 28 | | | ポンベツ遺跡 | | | ○ | | 5～20 | ◎ | × | × | 大井1984 |
| 29 | | | 知床岬遺跡 | | ○ | ○ | | 20 | ◎ | △ | × | 松下ほか1964 |
| 30 | | | チャシコツ岬下B遺跡 | | | ○ | ○ | 10 | △ | △ | ○ | 松田ほか2002<br>松田ほか2011他 |
| 31 | | | チャシコツ岬上遺跡 | | | ○ | ○ | 49～55 | ◎ | △ | ○ | 平河内編2014<br>本報告 |
| 32 | | | ウトロ滝ノ上遺跡 | | | | ○ | 50～55 | △ | × | × | 駒井編1964 |
| 33 | | | 須藤遺跡 | | | | ○ | 3～15 | ◎ | △ | × | 金盛ほか1981 |
| 34 | | | ピラガ丘遺跡(第Ⅰ地点) | | | | ○ | 5～9 | △ | × | × | 米村1970 |
| 35 | | | ピラガ丘遺跡(第Ⅱ地点) | | | | ○ | 6～10 | ◎ | × | × | 米村ほか1972 |
| 36 | | | ピラガ丘遺跡(第Ⅲ地点) | | | | ○ | 19～22 | ○ | × | × | 金盛1976 |
| 37 | 道東(根釧) | 羅臼町 | 松法川北岸遺跡 | ○ | ○ | ○ | ○ | 5 | ○ | × | × | 大場ほか1984 |
| 38 | | | 相泊遺跡 | | ○ | ○ | | 10 | △ | △ | ○ | 沢ほか1971<br>涌坂1996 |
| 39 | | | 知円別川南岸遺跡 | | | ○ | | 35～42 | △ | × | ○ | 涌坂編1999 |
| 40 | | | トビニタイ遺跡 | | | ○ | ○ | 13 | ◎ | × | × | 駒井編1964 |
| 41 | | | 船見町高台遺跡 | | ○ | | ○ | 10～12 | △ | × | × | 本田ほか1980 |
| 42 | | | サシルイ北岸遺跡 | | | | ○ | 14 | △ | × | ○ | 宇田川1975 |
| 43 | | | ルサ遺跡 | | | | ○ | 5～20 | - | × | ○ | 駒井編1964 |
| 44 | | | 隧道丘陵地遺跡 | | | | ○ | 44 | △ | × | × | 涌坂2002 |
| 45 | | | オタフク岩遺跡(第Ⅰ地点) | | | | ○ | 40～45 | △ | △ | × | 涌坂・豊原1991 |
| 46 | | 標津町 | 三本木遺跡 | ○ | ○ | | | 3 | △ | × | × | 北構1992<br>工藤1992 |
| 47 | | | 伊茶仁孵化場第一遺跡 | | | | ○ | 5～10 | - | × | × | 椙田1980 |
| 48 | | | 伊茶仁カリカリウス遺跡 | | | | ○ | 20 | ◎ | ○ | × | 椙田・椙田1982他 |
| 49 | | | 伊茶仁B遺跡 | | | | ○ | 21 | ○ | △ | × | 石附1973 |
| 50 | | 別海町 | 浜別海遺跡 | | | | ○ | 5 | - | × | × | 北構1971 |
| 51 | | 中標津町 | 当幌川左岸竪穴群 | | | | ○ | 8～18 | △ | × | × | 椙田・椙田1987 |
| 52 | | 弟子屈町 | 下鐺別遺跡 | | | | ○ | 96～97 | - | × | × | 沢1971 |
| 53 | | 根室市 | 弁天島 | ○ | ○ | ○ | | 11 | ○ | △ | ○ | 八幡ほか1966<br>北地文化研究会1968他 |
| 54 | | | トーサムポロ遺跡 | | ○ | ○ | | 10～25 | ○ | △ | ○ | 前田・山浦2004<br>三浦ほか2015 |
| 55 | | | ノッカマップ遺跡 | | | ○ | | 18～19 | △ | × | × | 岩崎・前田編1980 |
| 56 | | | オンネモト遺跡 | | | ○ | | 20 | △ | × | ○ | 国分ほか1974 |
| 57 | | 厚岸町 | 下田ノ沢遺跡 | | | | ○ | 3～5 | - | △ | ○ | 厚岸町下田ノ沢遺跡群調査会編1972 |
| 58 | | 標茶町 | トブー遺跡 | | | | ○ | 14 | △ | × | × | 宇田川・豊原1984 |
| 59 | | 浜中町 | 姉別川17遺跡 | | | | ○ | 23～28 | - | × | × | 福士1983 |
| 60 | 道南 | 奥尻町 | 青苗砂丘遺跡 | ○ | ○ | | | 5～10 | △ | × | ○ | 皆川編2002<br>越田編2003 |

註）竪穴住居数：△10未満、○10～15、◎16以上。ただし、残存する竪穴のうち他時期に属するものとの区別が困難な場合は「-」で示した。
墓数：×：未確認、△10未満、○10～20、◎21以上。
廃棄層の有無：○は確認、×は未確認。

## 第３節　大陸や本州との関係性

オホーツク文化の分布域は大陸と本州に挟まれ、北と南の両地域から強い影響を受ける位置にあった。そのため、オホーツク文化中期～後期初め（6～8世紀）頃にはアムール川流域の靺鞨系文化からの影響を受けて斉一化し、金属製品、ブタ、穀物などの大陸産品の流入が顕著であることが知られる（臼杵2005）。しかし、その後黒水靺鞨が渤海国に服属すると次第に大陸との交流は希薄化し、彼らの交易相手は南の擦文文化を経由した本州側へと変化することとなった（臼杵2005）。その証に8世紀後半になるとオホーツク文化における武器や装飾品が大陸製品から本州製品へ切り替わることが指摘されている（高畠2005）。つまり、チャシコツ岬上遺跡が機能していたオホーツク文化終末期には擦文文化および本州との結びつきが非常に強かった時期ということになる。上記した本州との関係性を示す遺物としては鉄製品が挙げられる。チャシコツ岬上遺跡では調査面積に比して比較的多くの鉄製品が出土しており、チャシコツ岬上遺跡全体としても多量の鉄製品が流入していたことが窺える。多くは実用的な刀子などであるが、22・23号竪穴上層廃棄層から出土した神功開寶のように明らかに実用的でない異質なモノも出土している。

### １．神功開寶の出土とその意義

神功開寶は、765（天平神護元）年初鋳の法定貨幣であり、皇朝十二銭の３番目、富本銭を含めると４番目に日本で発行された銅銭である。この年は、恵美押勝（藤原仲麻呂）の乱を鎮め、称徳天皇が淳仁天皇を廃し重祚した年にあたり、恵美押勝の政策の見直しを進めていた時期にあたる。そのため760（天平宝字４）年に押勝により発行された萬年通寶に代わり発行されたのが神功開寶であった（利光1973）。そして、782（天応２）年の鋳銭司の廃止でその鋳造は停止したが、使用は継続されていた。その後、796（延暦15）年に新たに隆平永寶の発行が開始され、同時に４年後に旧銭の使用は禁止されることが定められた（『日本後紀』延暦十五年十一月、詔）。しかし808（大同３）年の勅では、旧銭の併用が認められている。遺跡出土例から、古代の遺構・包含層において、ほぼ同時期に埋没したと考えられる出土銭貨の組成を見ると、隆平永寶と続く818（弘仁9）年初鋳の富寿神寶との共伴例が少数だが存在するので、９世紀前半まである程度流通は継続したらしい。しかし、その後の度重なる新銭の発行と旧銭の回収が進む中で、10世紀末には奈良時代の貨幣はほぼ姿を消していた。『日本紀略』に987（永延元）年に、賀茂上社の鳥居周辺から古銭782文（和同開珎・萬年通寶・神功開寶）が発見された記事がある。その際にそれらの使用の可否を陰陽寮に占わせたことから、10世紀末には、すでに一般に知られていなかったことがわかる（利光1973）。

また、神功開寶は字形や縁・郭の形状によるヴァリエーションがある。チャシコツ岬上遺跡出土例は、「功」字の作りが刀になりノの部分が長い「長刀」、「開」字を隷書にする「隷開」であり、「寶」字の貝がやや小振りである。平城京分類のF型式にあたる（奈良国立文化財研究所1975）。神功開寶として、一般的な形態である。ただし、厚さが薄く、重量も2.19ｇと、神功開寶の中では非常に軽い。神功開寶の重量はおおむね4ｇ前後に分布するので、その点では特殊な銭である。銭文に摩耗が見られることも、軽量化に影響していよう。しかし、摩耗の影響が比較的少ないはずの内厚も0.35 mmと薄いので、当初から比較的薄く製作された製品であったことは確かであろう。神功開寶には鋳型のズレやヒビ、バリ残しなどが比較的よく見られ、製品として容認される基準が和同銭などに比べ広いと考えられるので、重量についてもさほど問題にされなかったと思われる（松村2009）。ただし、外径24.51 mmと全体が若干小ぶりであり、観察すると外縁端が丸く仕上げられ、外郭の段差もなだらかにされている。通有銭の外縁部周囲を、後に研磨して加工したらしい。

この銅銭は、当然本州から北海道道部まで運ばれたことになるが、オホーツク人が直接本州で入手したのではなく、擦文文化圏を経由したと考えるのが妥当であろう。続縄文文化末期から擦文文化前半期には、太平洋側と日本海側との２つのルートにより東北地方との間に交易が行われ、古代国家との接触もなされたらしい。

一方、奈良時代の銭貨は、中世の一括埋納銭を除くと、陸奥国・出羽国を含む東北地方では出土例がきわめて少ない。これは、当時この地域では銭貨が流通する場が存在しないと考えられるので、当然のことといえる。

しかし、銭貨が存在しなかったわけではなく、銭貨が中央から持ち込まれたと考えられる多賀城や秋田城などの中心的な城柵周辺では、祭祀の祭料や墳墓の副葬品として、神功開寶は見られないものの数種の皇朝十二銭が出土している。この神功開寶も、それらの城柵における朝貢交易で入手されたものであろう。その時期は、本銭の摩耗の様子を見ても、鋳造後から一定期間の流通・使用の後であったと思われる。

また、８世紀後半から９世紀初頭にかけて、日本海ルートによる秋田城での交易が増大し、９世紀に全盛を迎えることが指摘されている（簑島　2015）。774（宝亀5）年の陸奥の海道蝦夷の蜂起は、陸奥側の律令国家との交易にも影響したであろうから、この時期に北海道・本州間の交易は出羽に集中した可能性が高い。つまり、本銭は、８世紀末から富寿神寶の発行が開始される818年ころまでの間に、秋田城・出羽国府での交易で入手された可能性が高い。隆平永寶発行にともなう神功銭の利用停止の詔の内容が効力を持った結果であるとすれば、800年までに、不要銭が擦文人との交易品とされたのかもしれない。

本銭が交易品となった理由はどのように考えられるであろう。擦文人が銭貨に大きな経済的価値を見出していたとは考えられないので、律令国家側から朝貢に対する禄物として与えられたと考えられる。ウサクマイN遺跡の富寿神寶、茂漁８遺跡の隆平永寶も同様な形で北海道に渡ったのであろう。このような傾向は、茂漁古墳群で出土している和同開珎から考えて、８世紀前半頃から存在したと思われる。その段階では東北における墳墓の影響を考慮すると、太平洋側ルートを通じて北海道にもたらされたのであろう。そして、この段階で擦文社会に貨幣の価値が知られていたことになる。

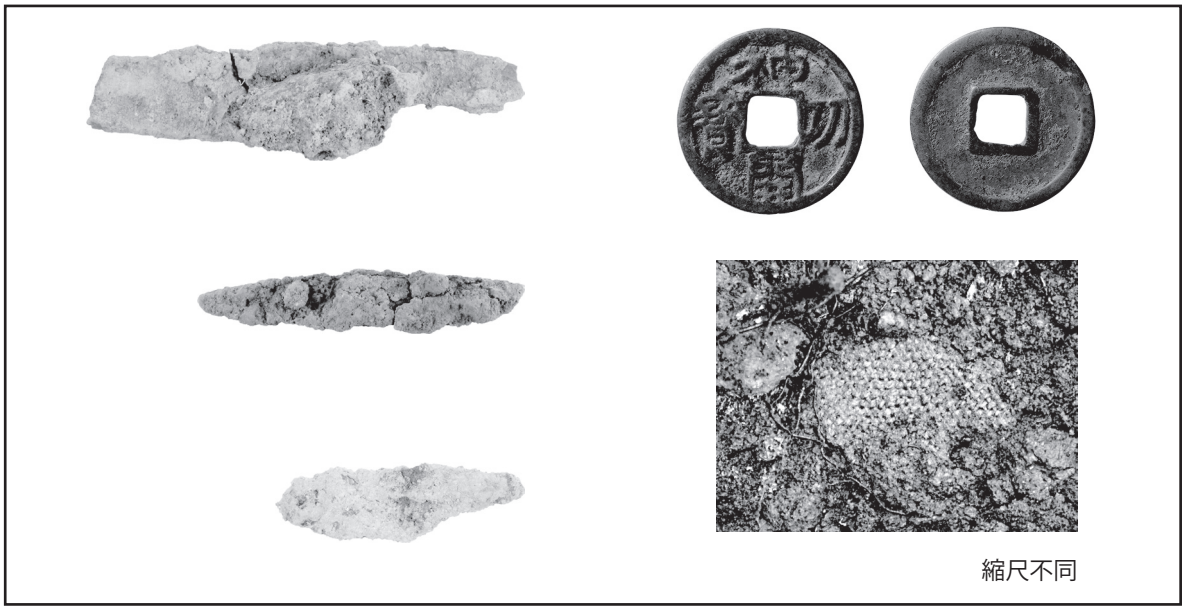
城柵とその周辺における貨幣は、上記のように祭祀関連で使用される場合が多い。多賀城に関連する山王遺跡多賀前地区では、８世紀末から９世紀初頭の河川跡から人面墨書土器、形代、斎串などの祭祀遺物とともに隆平永寶が出土しており、祓えなどの律令祭祀の祭料の一つと考えられる（宮城県教育委員会1996）。また、秋田城では、外郭東門の内側の南の８世紀後半の竪穴住居の床に埋められた壺内に萬年通寶５枚が納められており、胞衣壺と考えられている（小松1994）。秋田城、多賀城にまで、発行開始から時間を置かずに新銭がもたらされているのも、両者の例からわかる。出土例はないものの神功開寶も陸奥・出羽にもたらされていたであろう。そして、銭貨の祭祀的な利用は、平城京などの都城でもさかんに行われており、銭貨に呪力を見出す思想は律令国家の北辺まで浸透していたと考えられる。そのために、擦文人：渡島蝦夷にも、象徴的な意味で貨幣が与えられ、さらに擦文人からオホーツク人に対しても、同様な形で交易品とされたのであろう。本貨幣の外縁が意図的に研磨されているのは、金属光沢を持たせることでより象徴的効果を高めようとした可能性もある。

## ２．その他の交易品と北海道の産物

オホーツク人の非自製品という点では2号墓から出土した織物断片も注目される。織物断片は墓坑上の積石直下から出土し、炭化によって運良く残存していたものである。第3章4節の分析によれば、本資料は靭皮繊維を素材とした平織組織の織物であり、目梨泊遺跡（佐藤1994）やトビニタイ遺跡（駒井編1964）などから出土しているものの類品に位置づけられる。しかし、本資料は織密度が極めて高いこと、靭皮繊維が驚くほどきれいに取り出された上で糸づくりが行われている点は他に例を見ないことが指摘されている（第3章4節吉本・宮地）。これより、緻密に織り込まれた高品質な布であることは疑いないが、気がかりなのはこれほどの優品がどういった経緯でオホーツク文化の集落に持ち込まれたのかということである。

まず、チャシコツ岬上遺跡の利用時期には大陸との関係性は希薄化していた可能性が高いことから、本資料に関しても本州との交易で得たものと考えて差し支えないだろう。若干年代は遡るがオホーツ人が布に関心を抱いていることは『日本書紀』に記述がされている。すなわち、660年の阿倍比羅夫の北征の際、粛慎：オホーツク人と接触を図るため「綵帛・兵・鐵」（絹・武器・鉄）などを海岸に置いたところ、粛慎の老翁2名が布一端を一度は持ち帰ろうとしているのである。このことから当時のオホーツク人の日本製の布に対する関心の高さが読み取れる。

しかし、このような直接的な入手は考えにくいので、やはり前述した神功開寶と同様、擦文人を介した秋田城からのルートによってもたらされたものと考えられる。北方交流の拠点であった秋田城では蝦夷の朝貢に際して饗宴と給禄をもって応接したとされており、9世紀半ばまでには朝貢する蝦夷たちへの給付が出羽国の財政を圧迫




**第89図 出土した本州系遺物（鉄製品・神功開寶・布）**

するほどであったとされる（箕島2015）。つまり、可能性の1つとして考えられるのは秋田城で「調」として納めていた布が朝貢に対する給禄として擦文人を経由して流入したということである。しかし、出羽の調布がはたして本遺跡の資料のように緻密で高品質であったかは不明確であるため、今後は発掘品だけでなく伝世品との比較検討が必要となってくるだろう。いずれにせよ、神功開寶や布などの本州製品と考えられるもの（第89図）がオホーツク文化の遺跡から出土した事実は、擦文人を介した古代律令国家との交流を示していると評価できる。

ところで、こうした本州製品への見返り品はオホーツク文化では動物の毛皮類であったとされ、それを裏付けるように遺跡からは多くの動物遺体が検出されている。特にヒグマに関しては阿部比羅夫の北征に伴う「羆皮七十枚」に代表されるように、オホーツク文化全時期にわたって広く利用が認められる。一方で、クロテン皮についてもオホーツク文化から日本社会への流入の可能性が論じられている（種市 2001）。ではこの交易品としてのクロテン皮の位置づけを北海道のオホーツク文化にも当てはめることができるだろうか。

北海道にはクロテンの亜種であるエゾクロテンが生息し、体色の美しさでは大陸やサハリン産のクロテンに劣るが、毛質は同等とされる。道東部のオホーツク文化集落ではこのエゾクロテンの遺体がしばしば出土しており（金子 1972、西本 1995、佐藤 2009・2012）、骨塚にも含まれることから重要視されていたことが窺える。しかし、肉は食用とするには量が少なく、おそらくは毛皮利用が主であったと考えられる。では、衣服とするにはいったいどれほどの量が必要であったのだろうか。江戸時代や中国明末の史料によれば、貂裘を 1 領作るにはおよそ 60 張のテン皮が必要であったとされ（大舘 2010、箕島 2015）、素材を交易品として流通されるには相当量を捕獲する必要性がうかがえる。ところが、エゾクロテンの遺体の出土が目立つ道東部のオホーツク文化集落でさえ、その出土量は竪穴住居 1 軒から 10～20 個体程度であり、毛皮交易を意識した生産にしては量が少ない。その状況はチャシコツ岬上遺跡においても同様であり、遺跡から出土するエゾクロテン個体数は貂裘の必要量に遠く及ばない。

海を生業の基盤とするオホーツク人が毛皮交易のためにエゾクロテンの生息する森林内へ進出していった可能性もあるが、主に集落付近の周囲や廃棄場にやってきた個体を捕獲していたと考えるのが妥当であろう。よって、交易品として流通していたとしてもその量は少数であることが予想され、北海道のオホーツク文化における主な産物はヒグマや海獣類の毛皮であったといえよう（第 90 図）。

（平河内毅）

第90図 周辺諸地域との交流

## 第４節　今後の課題

チャシコツ岬上遺跡の発掘調査は 1949（昭和 24）年に河野広道博士らの試掘以来、実に 64 年ぶりであった。これまで全く手付かずの状態で保存されてきたが、今回の調査成果により本遺跡がオホーツク文化の変遷を象徴する重要な遺跡であることが改めて理解された。特に、神功開寳の発見は古代の日本社会と北海道のオホーツク文化との関係性を窺い知る大きな成果の 1 つと言える。こうした調査成果をあげることができた背景には本遺跡の良好な保存状態が大きく関係している。というのも、調査に着手する段階で土地の改変や盗掘の痕跡は全く認められず、わずかにヒグマの冬眠穴によって一部が掘削されているのみであった。そのため、小規模な調査面積であるにも関わらず、多くの情報を得ることができ、遺跡への影響を最小限に留めることができた。

しかし、わずかな調査面積であるため未だ解明できていない点が存在するのもまた事実である。例を挙げるとすれば、遺跡内での集落変遷の様相、トビニタイ文化の竪穴住居跡の有無の確認などといったことがある。これらの課題は今回の調査によって、オホーツク文化からトビニタイ文化への明らかな繋がりが示されたことによって認識したものであるが、遺跡への影響を押さえつつ確認することが困難というのが実情であった。確かに、31 軒すべての竪穴を発掘調査すれば明らかになることではあるが、完全な状態で残る本遺跡の価値を半減することにもつながる。そのため、これらの命題の追求にあたっては今後慎重に調査手法等を検討する必要があるだろう。

また、調査を進める中で本遺跡の自然崩壊についても改めて認識することとなった。海岸部からの観察ではチャシコツ崎自体が波や流氷によって浸食されている状況が顕著に認められ、海岸の磯部分には崩落した巨大な岩石がそこかしこに見られる。しかしながら、こうした崩落はここ数十年で起きたようなものではなく、今後急激に風化が進行することも考えられないため、当面の間は現状保存を前提に経過を観察する必要があるだろう。むしろ、防止すべきはエゾシカの侵入であって、踏圧に伴う浸食によって縁辺部の崩落を助長しかねない状況である。

町教委としてはこれらの課題を踏まえ、チャシコツ岬上遺跡の文化財的価値を改めて認識し、本遺跡の適切な保存と活用を図ってゆく予定である。また、今後の活用にあたっては安全性に配慮した整備を実施し、遺跡内へのアクセスを可能にすることで地域の教育資源および観光資源として積極的に保存活用を進めてゆきたい。その際は観光部局ともタイアップし、他の町内史跡等を含め総合的な活用を進める方向性である。

また、学術的にも価値の高い遺跡であることが今回の調査によって再確認されたため、今後も調査研究を推進するとともに、その成果を町民に還元し、一般に広く周知していく必要があるだろう。そして、今後は斜里町内だけでなく、近隣市町村と古代オホーツク文化圏をつなぐ広域的なネットワークを構築し、活用を図って行くことが期待される。

（平河内毅）

## 引用文献


愛場和人・広田良成（編）.2015. 根室市トーサムポロ湖周辺竪穴群（1）. 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター

青柳文吉 .1995. 湧別町川西遺跡 . 北海道北方民族博物館調査報告 . 北海道立北方民族博物館厚岸町下田ノ沢遺跡群調査会（編）.1972. 厚岸町下田ノ沢遺跡 . 北海道発掘調査シリーズ 8. 北海道出版企画センター

秋葉実 .1985. 戊午 東西蝦夷山川地理取調日誌 中 . 北海道出版企画センター

天野哲也 .2008. 古代の海洋民オホーツク人の世界 . 株式会社雄山閣

荒生健志（編）.1986. 元町 2 遺跡 . 美幌町教育委員会

荒川暢雄（編）.1997. 礼文町香深井 5 遺跡発掘調査報告書 . 礼文町教育委員会

石田肇・西本豊弘・松田功 .1994. ウトロ遺跡神社山地点第三次 (1990 年度 ) 発掘調査報告 . 知床博物館研究報告 第 15 集 . 斜里町立知床博物館

石附喜三男（編）.1973. 伊茶仁遺跡 B 地点発掘調査報告書 . 北地文化研究会

稲垣はるな（編）.1999. 能取岬周辺の遺跡 . 北方民族博物館調査報告 2. 北海道立北方民族博物館

岩崎卓也・前田潮 .1980. 北海道頭部地区における考古学的調査 . 筑波大学先史学・考古学研究調査報告 I . 筑波大学歴史・人類学系

右代啓視・山田悟郎・村上孝一・為岡進 .2000. 枝幸町ウバトマナイチャシ第 2 次発掘調査外報 . 北海道開拓記念館調査報告 . 北海道開拓記念館

内山真澄（編）.1995. 利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書 . 利尻富士町教育委員会

内山真澄（編）.2000. 香深井 5 遺跡発掘調査報告書 2. 礼文町教育委員会枝幸町教育委員会（編）.1985. ホロベツ砂丘遺跡 . 枝幸町教育委員会枝幸町教育委員会（編）.1988. 目梨泊遺跡 . 枝幸町教育委員会

宇田川洋・豊原熙司 .1984. トブー遺跡の発掘調査 . 釧路川流域史研究会会誌・釧路川 3. 釧路川流域史研究会

宇田川洋（編）.1975. 幾田 . 羅臼町文化財報告 2. 羅臼町教育委員会

宇田川洋（編）.1981. 河野広道ノート考古篇 1. 北海道出版企画センター

臼杵勲 .2005. 北方社会と交易 - オホーツク文化を中心に -. 考古学研究 52-2. 考古学研究会

栄原永遠男 .1993. 日本古代銭貨流通史の研究 . 塙書房

栄原永遠男 .2011. 日本古代銭貨研究 . 清文堂

大井晴男・大場利男（編）.1976. 香深井遺跡上 . 東京大学出版会

大井晴男・大場利男（編）.1981. 香深井遺跡下 . 東京大学出版会

大井晴男 .1984. 斜里町オホーツク文化遺跡について . 知床博物館研究報告第 6 集 . 知床博物館

大舘大學 .2010. 日本古代のクロテンの皮衣（黒貂裘）の形状について .BIOSTORY14. 生き物文化誌学会

大西秀之 .2009. トビニタイ文化からのアイヌ文化史 . 株式会社同成社

大場靖友・本田克代・豊原熙司・涌坂周一 .1984. 松法川北岸遺跡 . 羅臼町文化財報告 8. 羅臼町教育委員会

大場利夫・奥田寛 .1960. 女満別遺跡 . 女満別町教育委員会

大場利夫・新岡武彦・大井晴男・菊池俊彦 .1972. 枝幸町川尻北チャシ調査外報 . 枝幸町教育委員会

岡孝雄 .2010. ウトロ地域における地形解析業務委託報告書 . アースサイエンス株式会社

勝井義雄・後藤芳彦・合地信生・舩山淳 .2007. 知床の地質 . しれとこライブラリー 8. 知床博物館

金盛典夫・村田良介・松田美砂子 .1981. 須藤遺跡・内藤遺跡発掘調査報告書 . 斜里町文化財報告 1. 斜里町教育委員会

金盛典夫 .1976. ピラガ丘遺跡第Ⅲ地点発掘調査報告 . 斜里町教育委員会

金沢悦男 .1995. 八・九世紀における銭貨の流通－特に畿外を中心として－. 日本古代の法と社会 . 吉川弘文館

北構保男・前田潮 .2009. 根室市弁天島遺跡 14 号竪穴の発掘調査 . 北地文化研究会

北構保男 .1992. 標津町三本木オホーツク遺跡試掘調査外報 . しべつの自然歴史文化 : 標津町ポー川史跡自然公園紀要 1. 標津町ポー川史跡自然公園

北構保男（編）.1971. 浜別海遺跡 . 北地文化研究会

北沙織・土肥幸子（編）.2017. 北海道利尻富士町沼浦海水浴場遺跡第 1 次発掘調査報告書 . 礼文・利尻島遺跡調査の会

鬼頭清明 .1984. 平安初期の銭貨について . 奈良平安時

代史論集下巻 . 吉川弘文館
国分直一・北構保男・増田清一・岩崎卓也・前田潮 . 1974. オンネモト遺跡 . 東京教育大学文学部考古学研究報告 4. 東京教育大学文学部
越田賢一郎（編）.2003. 奥尻町青苗砂丘遺跡 2. 北海道埋蔵文化財センター重要遺跡確認調査報告書 3. 財団法人北海道埋蔵文化財センター
河野広道 .1955. 先史時代史 . 第九章遺跡 . 斜里町史第一巻 . 斜里町
小松正夫 .1994. 秋田城跡出土胞衣壺の埋納銭「萬年通宝」について . 出土銭貨 . 創刊号
小柳正夫・因幡勝雄 .1969. 栄遺跡調査略報 . オホーツク沿岸もうぺっと（創刊号）. 紋別郷土史研究会
熊木俊朗・國木田大（編）.2012. トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点 . 東京大学大学院人文社会系研究科駒井和愛（編）.1964. オホーツク海沿岸知床半島の遺跡 . 下巻 . 東京大学文学部
工藤研治 .1992. 三本木遺跡の範囲確認調査（試掘）について . しべつの自然歴史文化 : 標津町ポー川史跡自然公園紀要 1. 標津町ポー川史跡自然公園
駒井和愛（編）.1964. オホーツク海沿岸知床半島の遺跡 . 下巻 . 東京大学文学部
佐藤孝雄 .2009. 骨塚から検出された鳥獣遺体 . 史跡最寄貝塚 . 網走市教育委員会
佐藤孝雄 .2012. トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点 7 号・9 号・10 号竪穴の脊椎動物遺体 . トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点 . 東京大学大学院人文社会系研究科
佐藤隆広 .1994. 目梨泊遺跡 . 枝幸町教育委員会
沢四郎・本田克代・宇田川洋・大沼忠春・西幸隆・豊原熙司・鶴丸俊朗 .1971. 羅臼 . 羅臼町文化財報告 1. 羅臼町教育委員会
沢四郎（編）.1971. 弟子屈町下鐺別遺跡発掘調査報告 . 弟子屈町教育委員会出土銭貨研究会北陸ブロッ（編）. 2000. 畿内・七道から見た古代銭貨 . 出土銭貨研究会第 7 回研究大会資料集 . 出土銭貨研究会
椙田光明・椙田美枝子（編）.1982. 伊茶仁カリカリウス遺跡発掘調査報告書 . 標津町教育委員会
椙田光明・椙田美枝子（編）.1987. 標津の竪穴 10. 標津町教育委員会
椙田光明 .1980. 標津の竪穴 3. 標津町教育委員会
其田良雄・河野本道（編）.1980. 知床国立公園幌別川口遺跡発掘調査報告書 . 斜里町教育委員会
高橋理 .1993. ウトロ遺跡神社山地点発掘報告 . 知床博物館研究報告 第 14 集 . 斜里町立知床博物館
高橋理 .2002. 付篇斜里町ウトロ・チャシコツ岬下 B 遺跡動物依存体 . チャシコツ岬下 B 遺跡 . 斜里町教育委員会
高橋理 2011. 付篇 3 北海道斜里郡斜里町ウトロチャシコツ岬下 B 遺跡の動物 . チャシコツ岬下 B 遺跡 . 斜里町教育委員会
高畠孝宗 .2004. 目梨泊遺跡 . 枝幸町教育委員会
高畠高宗 .2005. オホーツク文化における威信材について . 海と考古学 . 六一書房
武田修（編）.1995. 栄浦第二・第一遺跡 . 常呂町教育委員会
武田修（編）.1996. 常呂河口遺跡（1）. 常呂町教育委員会
利光三津夫 .1973. 神功銭鋳造をめぐる史的背景 . 続律令制とその周辺 . 慶應義塾大学法学研究会
豊原熙司・坂井通子 .2009. カモイベツ遺跡発掘調査概報 . 斜里町教育委員会
奈良国立文化財研究所 .1975. 平城宮発掘調査報告Ⅵ- 左京一条三坊の調査 . 奈良国立文化財研究所学報 . 第 23 冊 . 奈良国立文化財研究所
西本豊弘 .1995. 川西遺跡出土の動物遺体 . 湧別町川西遺跡 . 北海道立北方民族博物館
西本豊弘 .2003. 第 1 部根室市弁天島遺跡発掘調査報告 . 国立歴史民俗博物館研究報告 107. 国立歴史民俗博物館
野村崇・三野紀雄・平川善祥・山田悟郎・小林幸雄 . 1995. 雄武竪穴群遺跡 . 北海道開拓記念館研究報告 14. 北海道開拓記念館
平河内毅（編）.2014. チャシコツ岬上遺跡発掘調査報告書 . 斜里町文化財報告 37. 斜里町教育委員会
平河内毅（編）.2015. チャシコツ岬上遺跡発掘調査概要報告書 . 斜里町教育委員会
平川善祥・野村崇（編）.1982. 二ツ岩 . 北海道開拓記念館研究報告 7. 北海道開拓記念館
福士廣志 .1983. 姉別川 17 遺跡発掘調査報告 . 浜中町教育委員会
藤本強（編）.1972. 常呂 . 東京大学文学部
北地文化研究会 .1968. 根室市弁天島西貝塚調査外報 . 考古学雑誌 54-2. 日本考古学会

本田克代・豊原熙司・涌坂周一 .1980. 船見町高台遺跡 . 羅臼町文化財報告 4. 羅臼町教育委員会
前田潮・山浦清 .2004. トーサムポロ遺跡 R-1 地点の発掘調査報告書 . 北地文化研究会
前田潮・山浦清（編）.1992. 浜中 2 遺跡の発掘調査 . 礼文町教育委員会
松下亘・米村哲英・畠山三郎太・安倍三郎 .1964. 知床岬遺跡 . 北海道発掘調査シリーズ 7. 北海道出版企画センター
松村恵司 .2009. 出土銭貨 . 日本の美術 512. 至文堂
松田功（編）.2001. トーツル沼 1 遺跡発掘調査報告 . 斜里町文化財報告 15. 斜里町教育委員会
松田功（編）.2002. チャシコツ岬下 B 遺跡 . 斜里町文化財報告 16. 斜里町教育委員会
松田功（編）.2011. ウトロ遺跡 . 斜里町文化財報告 32. 斜里町教育委員会
松田功（編）.2011. チャシコツ岬下 B 遺跡 . 斜里町文化財報告 33. 斜里町教育委員会 .
松田功（編）1993. オショコマナイ河口東遺跡オタモイ 1 遺跡発掘調査報告書 . 斜里町文化財報告 5. 斜里町教育委員会
皆川洋一（編）.2002. 奥尻町青苗砂丘遺跡 . 北海道埋蔵文化財センター重要遺跡確認調査報告書 2. 財団法人北海道埋蔵文化財センター
簑島栄紀 .2015.「もの」と交易の古代北方史 . 勉誠出版
宮城県教育委員会 .1996. 山王遺跡Ⅳ多賀前地区考察編 . 宮城県文化財調査報告書第 171 集
森明彦 .2016. 日本古代貨幣制度史の研究 . 塙書房
山谷文人（編）.2011. 利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書Ⅱ. 利尻富士町教育委員会
米村衛（編）.1992. 嘉多山 3 遺跡嘉多山 4 遺跡 . 網走市教育委員会
米村衛（編）.2009. 史跡モヨロ貝塚 . 網走市教育委員会
米村哲英 .1970. ピラガ丘遺跡 . 斜里町教育委員会
米村哲英 .1972. ピラガ丘遺跡第Ⅱ地点発掘調査概報 . 斜里町教育委員会
涌坂周一・豊原熙司（編）.1991. オタフク岩遺跡 . 羅臼町文化財報告 14. 羅臼町教育委員会
涌坂周一 .1996. 相泊遺跡 2. 羅臼町文化財報告 16. 羅臼町教育委員会
涌坂周一 .1999. 知円別南岸遺跡 . 羅臼町文化財報告 17. 羅臼町教育委員会
涌坂周一 .2002. 隧道丘陵地遺跡 . 羅臼町文化財報告 18. 羅臼町教育委員会
稚内市教育委員会 .1964. 稚内・宗谷の遺跡　富磯貝塚　泊内竪穴住居跡　抜海岩陰遺跡 . 稚内市教育委員会